



このソナタは情熱と悲愴感が混然一体となった圧倒的なエネルギーが全編にたどられ、表情の豊かさとはげしさが胸に迫ってくる。1797年から翌年にかけて作曲された。

第1楽章 グラーヴェ、ハ短調、4分の4拍子(序奏)。アレグロ・ディ・モルト・エ・コン・プリオ、2分の2拍子(主部)、ソナタ形式。独創的で長い悲愴の情緒をたたえた序奏の後、情熱的な第1主題、流動的な第2主題と続く。

第2楽章 アダージョ・カンタービレ、変イ長調、4分の2拍子、3部形式。これまで書かれたもっとも優雅な祈りの気分をたたえる音楽といわれ、叙情的な歌をうたい上げる。

第3楽章 ロンド、アレグロ、ハ短調、2分の2拍子。軽快なロンド主題が何度か登場し、最後はffで強くはげしく終わる。

ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調 Op.53 「ワルトシュタイン」

ボヘミア出身のワルトシュタイン伯爵はベートーヴェンの才能を高く評価し、精神的、経済的の両面で支援を行い、ボンからウィーンに向かう21歳のベートーヴェンに「モーツァルトの精神をハイドンの手から受け取りなさい」という有名なことばを贈った。このソナタは、そんなワルトシュタイン伯爵に献呈されたため、この名がある。

作曲は1803年から翌年にかけて行われ、1804年夏に完成を見た。このころベートーヴェンの創作は飛躍の時期を迎え、ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」、交響曲第3番「英雄」、ピアノ・ソナタ第23番「熱情」、歌劇「フィデリオ」などの大作が次々に生み出され、独自の様式を築き上げている。「ワルトシュタイン」はその時期に書かれた中期の到来を告げる傑作で、壮麗な技巧と雄大な構図をもち、豊かな抒情性を備えている。

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ、ハ長調、4分の4拍子。印象的な8分音符和音のppの刻みに始まり、きらめくような第1主題が高音域に現れ、第1主題の3つの主要素が提示されていく。やがてドルチェ・エ・モルト・リガートと指示されたコラル風な第2主題が登場、ふたつの主題の対照性を見せる。

第2楽章 イントロダツィオーネ、アダージョ・モルト、8分の6拍子。巨大な第1楽章と次なるロンドをつなぐ美しい音楽で、ためらうようにうたわれる主題がやがて力強い歌となり、それらが対話風に拡大されてロンドへと流れ込む。

第3楽章 ロンド、アレグレット・モデラート、ハ長調、4分の2拍子。ボン地方の民謡から取られたといわれる素朴で幸福感あふれるロンド主題が全編を覆い、それが幾重にも様相を変化させ、至難な技巧を盛り込んでコーダへと進む。

弱音の美しさとウィーンの空気を放つ、 ブッフビンダーの馨しきベートーヴェン

伊熊よし子(音楽評論家) Yoshiko Ikuma

©Marco Borggreve

ルドルフ・ブッフビンダーのピアノは、弱音の美しさが大きな特質である。繊細さと詩的な雰囲気と静謐な美をただよわせる弱音。それは甘美でありながら一本芯の通った凛とした弱音であり、浸透力がすこぶる強い。そこにはえもいわれぬ薫りがたどられ、またエレガンスの極致も味わえる。

彼は長いフレーズを表現する箇所やテーマが同じ音型で登場するところなど、微妙な弱音を用いる。さらに舞曲の一気にトリルを進めるところなども、柔軟性を備えた弱音で野生動物の動きのようなしなやかさを見せる。それらはあくまでも自然に流れ、何度も聴きたくなる魔術的な美質を放っている。

ブッフビンダーのベートーヴェンのピアノ・ソナタは完全に手の内に入った演奏で、テンポが速く疾走するような空気を生み出す。聴き手はベートーヴェンの世界に強烈な引力で導かれ、まさにウィーンの空気を全身にまとう至福の時を味わうことになるのである。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 Op.13 「悲愴」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の前期の頂点をなす作品で、従来のピアノ・ソナタには見られなかった冒頭の荘重な序奏部が大きな特徴となっている。さらに緩徐楽章の美しい主題、第3楽章の明快なロンドも特筆すべきで、作曲者自らが与えた「グランド・ソナタ・パテティーク」というタイトルにも、ベートーヴェンの強い表現意志を感じ取ることができる。

ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調 Op.57 「熱情」

ベートーヴェンの実際の演奏は熱情的で劇的で荒々しいものだったといわれているが、そのピアノは人の心を強くとらえ、熱い血の通った人間が演奏しているものと評された。

この時代になるとピアノは大幅な改革が施され、鍵盤の数も増え、重要な機構も改良や発明がなされていく。ベートーヴェンも各種のピアノを弾き、とりわけブロードウッドを賞賛したといわれる。このメーカーの「古きを捨てて新しきを探る」という方針に共鳴したのかもしれない。

「熱情ソナタ」は、ベートーヴェンの雄渾無比と、ピアノを何より大切にした彼の至難な技巧が混然一体となったドラマティックな作品である。中期のピアノ・ソナタの傑作で、1804年から翌年にかけて書かれ、ベートーヴェンにとって激情的な意味をもつヘ短調で書かれている。

1802年に「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いて苦悩を吐き出した後、再び生きる勇気を取り戻したベートーヴェンは、襲いかかる過酷な運命に敢然と立ち向かうようになる。

そんな時期に書かれたこのソナタは、はげしい情熱に満ち、全楽章にわたって緻密な計算に基づく構成を備えている。第1楽章冒頭の運命の動機が第2楽章と第3楽章にも影響を与え、全体を有機的に結びつけ、特に第3楽章は緊迫感に満ちた終曲となっている。

第1楽章 アレグロ・アッサイ、ヘ短調、8分の12拍子。全曲を支配する分散音型の主和音が静かに下降、そして上昇し、「運命の動機」を提示する。華麗な技巧と精緻な表現力が要求される楽章で、ppに始まりpppで終わる緊張感の高い音楽である。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート、変ニ長調、4分の2拍子。主題と3つの変奏曲からなる静かでおだやかな楽章。各々の変奏が限りなく美しく、反復も多く行われる。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ、ヘ短調、4分の2拍子。ffによる減7の和音が連打され、主題が幾重にも変容し、プレストのコーダへと流れ込んでいく。最後はアルペッジョの連続により、すべての障害を乗り越えるようなはげしい勢いを見せて大曲の幕を閉じる。